

[実践報告]

児童の多様性に対応する小学校英語授業の 在り方に関する基礎研究

——小学校英語の「学びのユニバーサルデザイン」を試行する——

松本由美

要 約

小学校外国語および外国語活動では、学習目標言語も教授言語も外国語であるという特性上、言語情報のみに頼る内容伝達には限界があるため、①言語外情報によるコミュニケーションを使用する授業手法、②視覚、聴覚、身体感覚など多感覚を取り入れる多彩な教材、③歌唱、造形、身体など教科横断的な活動を取り入れて、授業を円滑に進める工夫がされている。筆者も、これまで小学校外国語活動に携わって、こうした言語情報による伝達内容を補完し伝わりやすくする工夫をしてきたが、10年間小学校外国語教育に携わった経験から、これらの工夫が多様な学習スタイルの児童も含めた児童の、理解を助ける「学びのユニバーサルデザイン」に相当するのではないかと感じてきた。今回、公立小学校の特別支援学級で外国語活動をする機会を得たので、この記録を精査して、小学校外国語科および外国語活動においてされている工夫が、果たして多様な学習スタイルの児童を助ける学習のユニバーサルデザインとして機能しているのか、「学びのユニバーサルデザイン」に照らし合わせて、整理検証してみたい。なお本稿における児童の多様性については、個人情報保護の観点から、診断ではなく、あくまでも本稿筆者の教育的観察の範囲であることを述べておく。

キーワード：小学校外国語、外国語活動、多様な学習スタイル、学習のユニバーサルデザイン

1. はじめに：小学校外国語の科目特性と学びのユニバーサルデザインの必要性

日本の公立小学校5、6年生を対象とする外国語科や小学校3、4年生を対象とする外国語活動は、学習指導要領（文部科学省2017）によって導入されて、2020年度から全ての公立小学校で本格実施されて3年が経とうとしている。しかし、いまだに小学校教員が英語指導（本稿では、学習指導要領（文部科学省2017）「第3章 指導計画の作成と内容の取扱い」（解説p.54）に従い、外国語科および外国語活動において取り扱う言語は、英語とする）に対して不安を覚えていることが株式会社イーオンが現役小学校教員を対象として行った「小学校の英語教育に関する教員意識調査2021」からも読み取れる。そこでは、外国語および外国語活動の授業運

営がうまくいっているかどうか教員の所感を尋ねているが、小学校5、6年の外国語を担当する教員のうち42%が、授業運営が「うまくいっていない」「あまりうまくいっていない」と答えていて、「うまくいっている／おおむねうまくいっている」と答えた35%を上回っている。また、小学校3、4年の外国語活動を担当する教員のうち48%が「うまくいっていない／あまりうまくいっていない」と答えていて、「うまくいっている／おおむねうまくいっている」と答えた28%を上回る結果となっている。さらに、授業運営上難しいと感じている点を尋ねたところ「スピーキング（やりとり）」がトップ、続いて「スピーキング（発表）」がであり、4技能のなかで特に「スピーキング」を教えるのが難しいと感じていることがわかったと報告されている（イーオン 2021）

一方でイーオン（2021）は教員が自身の英語力、および英語指導力の向上に費やす学習時間確保に苦勞している様子がわかることも報告している。このことを裏付けるかのように、令和3年度「英語教育実施状況調査」概要（文部科学省2021）によると、小学校教員のうち中学校・高等学校の教員免許状（外国語）を有している者は7.5%であり、さらに文部科学省が教師の望ましい英語力の基準としているCFERB2以上を取得している者となると、小学校教員全体のうち、1.5%にしか満たないことが報告されている。小学校教師の100人に1.5人しか英語の授業をする英語力を満たしていないことになる。

外国語は、国語科と同様に、言語を学習対象としている科目であるが、大きく異なるところはその言語が外国語（英語）であることである。また、中学校、高等学校では授業中に教師が指導する際に使用する言語、すなわち教授言語も、外国語（英語）であることが求められている。小学校英語では、中学校や高等学校と異なり教授言語の全てを英語にすることは求められていないものの、『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』（文部科学省2017）によると、「教師が積極的に英語を使用することにより、児童が一生懸命に教師の英語を聞こうとする態度を引き出すことにもなる。指導者（日本人の教師）も英語を使うよいモデルとして、授業中の指示や質問にできるだけ英語を使うように努力したいものである。」と、クラスルームイングリッシュ（教室英語）と呼ばれる、教室内で使用する、挨拶、誉め言葉、指示などの平易な英語が使用されることは推奨されている。このことを先の小学校教員の英語力のデータと併せ考えると、小学校教員が小学校外国語や外国語活動を行う際に不安を覚えるのも当然であろう。

つまり小学校外国語や外国語活動の難しさは、英語を使った情報（内容）伝達に起因するものであるが、学習指導要領に定められたものを確実に児童に伝える必要がある。そのための方法の二つあり、一つは小学校教員の英語を使った情報（内容）伝達能力つまり英語力を高めること。この取り組みとして様々に教員研修が開催されているのは周知のとおりである。もう一つは、英語を使った情報（内容）伝達の方法を工夫すること、つまり学習デザインを工夫することである。

他方、筆者は、NPO法人J-SHINE協会が排出する小学校英語指導者資格の取得を目指す大

学生が、資格を取得するために必要な、35時間の教壇実習を指導してきた。この教壇実習に際しては、まず授業者である大学生が英語を使って英語を教えられるように、そして小学校外国語や外国語活動を円滑に進めるために、言語情報による伝達内容を補完し伝わりやすくするように学習デザインを工夫してきた。

また、学生の教壇実習では特別支援級も担当させていただいた経験から、これらの言語情報による伝達内容を補完し伝わりやすくする工夫が、多様な児童の学習スタイルに対応し、こうした児童の学習も助けるユニバーサルデザインを満たしているのではないかと感じていた。今回、公立小学校の特別支援学級で外国語活動をさせていただく機会を得たので、この活動記録を振り返りながら小学校外国語や外国語活動における工夫を改めて整理し、これらが多様な個性にも対応する授業、つまり「学びのユニバーサルデザイン」を満たしているのか、検討する材料としたい。

本稿の構成は次のとおりである：第2章では、まず「学びのユニバーサルデザイン（UDL）ガイドライン全文 ver.2.0」から「学びのユニバーサルデザイン」の概念とガイドラインを紹介する。次に、「学びのユニバーサルデザイン」と関連付けた小学校外国語・外国語活動に関する先行研究を紹介する。第3章では、本稿筆者と指導学生が行った、特別支援級での外国語活動の授業実習の様子を報告し、第4章で考察する。第5章で全体をまとめ、今後の展望を述べる。

2. 先行研究

2.1 「学びのユニバーサルデザイン（UDL）ガイドライン Version 2.0」 The Center for Applied Special Technology (CAST) (2011), 日本語版翻訳：金子晴恵，バーンズ亀山静子

2.1.1 学びのユニバーサルデザインの三原則

「学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning：以下、UDL）」とは、1990年代初頭から、米国の教育研究機関であるThe Center for Applied Special Technology（以下CASTと記す）が研究開発を始め、提言してきているカリキュラムの原則、ガイドラインである。まず、どの子供も等しく「学びのエキスパート」に育つはずであり、そこに何らかの障害があるとしたら、子供の側ではなくカリキュラム側（ここでのカリキュラムとは、「教育の目標や評価まで含めた広い意味での教育方法や指導方針のこと」）が「融通が利かないone-size-fits-all」であり、どの子供にも対応するように、ガイドラインに沿って是正されるべきという考えに立脚している。

UDLのガイドラインは、「原則（もっとも大まかな説明）→ガイドライン→チェックポイント（もっとも詳細な説明）」の順で述べられているが、紙幅の関係から本稿の議論に必要な原則とガイドラインを抜粋して紹介する。

原則Ⅰ：提示のための多様な方法の提供

「提示された情報をどのように認識し、理解するかは、学習者によって異なり、一中略— 全ての学習者に最適な一つの提示方法というものが存在するのではなく、提示のためのオプション（複数の方法）を提供することが不可欠」

原則Ⅱ：行動と表出のための多様な方法の提供

「どのように学習を進めたり知っていることを表現するかは、学習者によって異なります。一中略— 現実には、全ての学習者に最適な一つの行動や表出の方法というものは存在しないので、行動と表現のためのオプション（複数の方法）を提供することが不可欠」

原則Ⅲ：取り組みのための多様な方法の提供

「感情は学習のカギを握る重要な要素ですが、どんな方法で学習に取り組んだりやる気を出したりできるかは、学習者によって顕著に異なります。一中略— 現実には、全ての学習者にとって全ての状況で最適な一つの取り組みの方法というものはなく、取り組み方についても多様なオプション（複数の方法）を用意することが不可欠」

以上の3つの原則のもとに、ガイドラインを提示しているが、重要なことは、児童の学習スタイルを困難の有無ではなく多様性として捉えていること、そして、ここでいうカリキュラムがどの児童にも等しく対応できる多様なオプションを備えるべきという考えであること、その多様なオプションを備えているものが、学びのユニバーサルティを充足する、求められているカリキュラムであること、である。

2.1.2 学びのユニバーサルデザインとインクルーシブ教育の関係性について

ここで、本稿で中心的に取り上げる学びのユニバーサルデザインと、類似したコンテキストで論じられることが多く、恐らく現状では、こちらの方が取り上げられることが多いと思われるインクルーシブ教育との関係性を明確にしておきたい。文部科学省は、まず、「小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編」（文部科学省2017）において、外国語活動および外国語の「指導計画の作成上の配慮事項」として

カ 障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと

『学習指導要領解説』（文部科学省2017）

が挙げられている。解説には「障害者の権利に関する条約に掲げられたインクルーシブ教育シ

システムの構築」を目指すこと、また、通常の学級においても、「各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図、手立てを明確にすることが重要であると。」と記されている。

一方、ユニバーサルデザインについては、今のところ「ユニバーサルデザイン2020行動計画」（文部科学省2020）において「障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすいようあらかじめ都市や生活環境をデザインする考え方」と述べるにとどまっている。

田上・猪狩（2017）はUD学会の見解として「『授業のユニバーサルデザイン』は『インクルーシブ教育システム』の一翼を担う」と紹介しており、さらに、長江清和・細渕富夫（2005）による「障害児が『通常の教育』の授業に参加する上での困難さを解消していこうとするバリアフリーの発想から、障害児も健常児も全ての子どもたちの教育的ニーズに応じた授業をつくるために、授業をユニバーサルデザインするという発想の転換が必要である」と取りあげて、「インクルーシブ教育の実現には、今までの障害児に対する「バリアフリー」的な支援から、全ての子どもたちに対する「ユニバーサルデザイン」の支援への転換の必要性を指摘している。」（田上・猪狩2017）と述べている。

まとめると、学びのユニバーサルデザイン（田上・猪狩（2017）の述べるユニバーサルデザイン教育）は、インクルーシブ教育を実現するための手段・方法であろう。本稿で同様に見做して論を進めたい。

2.1.3 学びのユニバーサルデザインのガイドライン

先の3つの原則の下には、下記のとおり、それぞれガイドラインが設定されている：

原則Ⅰ：提示のための多様な方法の提供

ガイドライン1：知覚するための多様なオプションを提供する（本稿記号G I—1）
同じ情報を異なる形態（例えば視覚、聴覚、触覚など）で提供する
利用者が自分に合わせてボリュームやサイズなどを調節できる形態で提供する

ガイドライン2：言語、数式、記号のためのオプションを提供する（本稿記号G I—2）
言語理解を助ける別の言語での提供や、言語情報にイラストやダンスなども含む、
非言語情報を加えたりする

ガイドライン3：理解のためのオプションを提供する（本稿記号G I—3）
教育の目的は「アクセス可能な情報」を「使える知識」に変換する方法を学習者に教えることなので、例えばチェックリストや、ヒントを与えるなど、全ての学習者が確実に順序を経て知識にアクセスし、使えるようになるための支援をする

原則Ⅱ：行動と表出のための多様な方法の提供

ガイドライン4：身体動作のためのオプションを提供する

ガイドライン5：表出やコミュニケーションに関するオプションを提供する（本稿記号GⅡ-5）

いずれも、例えばキーボードを操作して意見を述べるなど、あらゆる人が自身の考えや知識などを表出できるようにする

ガイドライン6：実行機能のためのオプションを提供する

原則Ⅲ：取り組みのための多様な方法の提供

ガイドライン7：興味を引くために多様なオプションを提供する（本稿記号GⅢ-7）
情報が学習者の注意を引き、認識されるように、学習者の個人間差や個人内差に対応したオプションを備えている

ガイドライン8：努力や頑張りを継続させるためのオプションを提供する（本稿記号GⅢ-8）

目標や目的を明確にしたり、協働学習グループを作ったり、最後までがんばれるようにサポートする。

ガイドライン9：自己調整のためのオプションを提供する（本稿記号GⅢ-9）

モチベーションを高め、苦手意識を持たないように調整すること、また、自己評価の機会を与え、自身をモニタリングする能力を高める

（「学びのユニバーサルデザイン（UDL）ガイドライン全文 Version 2.0」より、3原則、およびガイドラインの見出し文は原文のまま、原則、ガイドラインの説明文は本稿筆者が編集、下線および強調用太字を付加した。本稿記号を追加したものは、小学校英語指導者資格のための外国語および外国語活動の授業実習で取り入れていると考えられるものである。第3章の指導案の中に、当該ガイドラインを記号にて記載した）

かなり詳細なガイドラインが提示され、その下にさらに詳細なチェックポイントの詳細な説明があり、このまま指導案ですぐ実現できるように構成されているが、やはり米国における学びのユニバーサルへの取り組みは、日本より一歩進んでいる感がある。しかし、その米国においてすら、なお、基盤理論研究の進捗に比べて、実証研究は今後の現場からの貢献に頼らざるを得ないと、述べられている。

2.2 沢谷 (2020) : 「小学校外国語活動における教師の「学びのユニバーサルデザイン」に基づく実践—中学校・高等学校の英語教師との比較を通して—」

沢谷 (2020) は、小学校英語を担当する教師の不安は、自身の英語力のみならず、通常級にも教育的支援が必要な児童が一定数いることにもあることが、小学校外国語を担当する教員の不安を助長しているのではないかと疑問を投げ、その不安を解消するために取り入れたいものとして、UDLを紹介し、英語を専門とする中学校の英語教員5名、高等学校及び高等専門学校の英語教員4名と比較しながら、小学校外国語活動を担当する教員7名に、それぞれ、UDLの概念について知識をどの程度持ち、また実践しているのか調査している。

その結果、小学校外国語活動を担当する教員のUDL実践について以下の特徴をあげている：

- UDLの知識については、小学校教員と他校種の教員の間には、有意差はない
- 小学校外国語活動を担当する教員の特徴として、UDLの3原則のうち、「取り組みのための多様な方法の提供」(原則Ⅲ)や「提示(理解)のための多様な方法の提供」(原則Ⅰ)、「行動・表出のための多様な方法の提供」(原則Ⅱ)について、どの原則も同等に考慮にいれて授業づくりをしていることが分かる
- 中学校・高等学校・高等専門学校の教員については、「取り組みのための多様な方法の提供」(原則Ⅲ)や「提示(理解)のための多様な方法の提供」(原則Ⅰ)については9名中5人(45.5%)見られたが、「行動・表出のための多様な方法の提供」(原則Ⅱ)については、1人(9.09%)であった。

((沢谷2020)より本稿筆者が編集の上箇条書きにし、学びのユニバーサルデザインのガイドラインと照合し(原則Ⅰ)、(原則Ⅱ)、(原則Ⅲ)を付した。)

沢谷(2020)では、学びのユニバーサルを使った実践の意識調査ということで、実践そのものの具体は詳述されていないが、小学校外国語活動を担当した教員の自由記述として、以下のとおり報告している：

「取り組みのための多様な方法の提供」に該当する参加者の授業での工夫に関する回答

- この授業で何をするのか、黒板の端に書く。
- 授業の流れをなるべく定型化し、見通しが持てるようにする。
- 黒板の周りには必要最低限のものしか掲示せず、児童が集中して授業を受けられる環境を意識している。
- 児童の実態に応じてこれなら出来る、もしくはやりがいがあると感じる課題を提示する。
- ヘルプカードを1人1枚用意し、教師やほかの児童に助けを求めることがしやすいようにするとともに、児童の学習状況を把握できるようにしている

(沢谷(2020)表5より本稿筆者が抜粋し、一部編集した)

「提示（理解）のための多様な方法の提供」に該当する参加者の授業での工夫に関する回答

- ICTを活用する（課題の提示）.
- 誰でもわかるように指示を言葉だけでなく、掲示する.
- なるべく五感を使用させて体験的に学ぶ授業を目指している.
- 文字を、4線を含めて大きめに提示する

（沢谷（2020）表5より本稿筆者が抜粋，編集した）

沢谷（2020）は、小学校外国語活動に携わる教員がUDLの実践について、どの程度、またどの部分を取り入れているのか集計した報告が主体であるので、具体については、今後の研究が待たれるところである。

3. 小学校外国語活動の実際

そこで本稿では、本学の大学3年生が実習を行わせていただいている、小学校外国語活動の実際をここに紹介したい。本稿では紙幅の関係で、指導案を中心に紹介するものとして、学生の指導の詳細と、それに対応して進展していった児童の外国語への慣れ親しみの度合いの変化や、成果については、また機会を改めたい。

3.1 小学校外国語活動（実習）の概要

本学教育学部の小学校英語指導者資格を取得する大学生が、資格取得要件である教壇実習35時間を、町田、八王子市内の複数の公立小学校における、主に小学校1、2年生対象の小学校が独自に設定する外国語活動を、担当させていただいている。小学校側の要望に応じて授業回数は決定されるが、年間6回から10回程度である。指導計画、指導案は玉川大学の教員である本稿筆者と学生が協議しながら作成し、対象クラスは通常級および小学校側の希望があれば特別支援級にも伺わせていただいている。日程は年度当初、小学校と本学の学事日程をすり合わせて決定し、児童の英語力向上に支障の無いように、概ね等間隔で設定する。

本外国語活動（実習）は小学校英語指導者資格取得を希望する3年生が担当するが、今回ここに紹介するのは、学生実習の振りかえりと、学生実習カリキュラムの改善のために、既に小学校英語指導者資格の要件を満たし、指導力が完成している4年生2名が担当した。授業の流れの基本は通常の実習と変えず、指導案の詳細は本稿筆者の助言の下、この授業実習を担当する大学4年2名が作成したものである。実習は2022年10月から11月連続3回行わせていただいたうち、本稿では第一回の授業実習を紹介する

3.2 小学校外国語活動（実習）

小学校外国語活動（実習）の指導案は、下記のとおり。全て指導案のとおりに、実施することができた。

3.2.1 言語材料：

この指導案では3回かけて習得するものを記述している。外国語活動では、慣れ親しむことを目標とするので、特に1回目の活動で全てを習得しなければならない、というものではない。《“Dansinglish”》[Hi. Bye.] [How're you doing? Pretty good.] [Where're you from? I'm from Japan. What's your name? My name is Masami. Ouch! Are you all right? Let me try. This is fun. 《絵本Eric Carle, “From Head to Toe” Harper Trophy, 1997》head, neck, shoulders, arms, chest, knees, foot, toe(s), Can you do it? I can do it.

* 下記指導案に付された網掛けされた➡G I—1, 2, 3などの番号は、本稿pps.4-5のガイドラインの原則に付した本稿記号と一致する。

表1 本時案1/3

時間	児童 (S) の活動	指導者 (T) の活動と使用英語例	留意点 (★) 準備物 (・)
導入(1分)	♪ Hello Song を元気よく歌う。	T:1 <u>First, we will sing “Hello song”.</u> <u>Are you ready?</u> T:1 Everyone, stand up. Ts: (CDに合わせて歌う)	★歌い始めの合図をする ➡G III—8 ・ CD (“Hello song”) ・ ラジカセ
活動1 (25分) Dansinglish ♪ Hi ! (25分)	Ss: 音楽 (Tの歌) に合わせて“Dansinglish”を練習する。 Tのダンスイングリッシュを見る。 PCを見て、語句の意味を確認しながら、言い方や動きを練習する。	T1: Next, “Dansinglish” time. T: 語句の意味、発音、動きを全て (①～⑦) 確認する。(音楽なし) ① Hi, Bye ② How're you doing? Pretty good. ③ Where're you from? I'm from Japan. ④ What's your name? My name is Masami. ⑤ Ouch! Are you all right? ⑥ Let's me try! ⑦ This is fun. T: “Dansinglish”をT1T”が歌いながら踊って見せる。 T: 音、動きの確認をする。 <練習の流れ> 1. ①×2回 2. ②×2回 3. ③×2回	★“Dansinglish”付属教材のピクチャーカード (以下PC) を見せながら語句の意味、発音を確認する。➡G I—1 ★T2が意味を確認したらPCを黒板に貼る。 ・ PC (Hi) ・ DVD (“Hi !”) ・ PC➡G I—1

	<p>音楽に合わせて踊る。</p> <p>PCで語句の意味と動きの復習をする</p>	<p>4. ①②③ × 1回 5. ④ × 2回 6. ⑤ × 2回 7. ⑥ × 2回 8. ⑦ × 2回 9. ④⑤⑥⑦ × 1回 10. 全部通す × 1回</p> <p>音楽に合わせて児童と一緒に踊る。 T1: Let's sing together one more time with the CD. Please stand up! Are you ready? Ss: Yes ! Ts : (CDと一緒に歌う)</p> <p>T: Next, review time. T: Please copy me.</p> <p>T: Today's Dansinglish time is finished.</p>	<p><u>➡ G I - 3</u></p> <p>・ DVD (“Hi ! “) <u>➡ G I - 1</u></p> <p>★ T1は発音と動きを確認する。 ★ T2がPCを黒板から外す。 ➡ G III - 7</p>
<p>活動2 (18分) Story time (18分)</p>	<p>絵本を見ながら英語を聞く。</p>	<p>T1: Next story time! First, let's check the words. What is this? (動物 PC) Ss: ○○ ! T1: Yes, it's ○○ . Please copy me. ○○ 1,2 Ss: ○○ T1: Good. Next, ... <u>(8種類の動物で同じ流れ)</u> T1: Good job, everyone.</p> <p>Today's story is “From Head to Toe” T1: Let's start!</p> <p>(2回読む)</p> <p>(読み終わったら) T1: Next, review time. What is this? <u>(絵本のイラストを見せながら)</u> Ss: ○○ ! T1: Yes, it's ○○ .</p>	<p>・ 動物 PC 8枚 <u>動物の絵と動物名を掲載したA4サイズのPC</u> <u>➡ G I - 1, 2, 3</u></p> <p>★ 1回目 ・ Can you do it? I can do it. のやり取りを T1 と T2 で行う。 <u>・ 1回目はゆっくり読んで、動作を大きくつける。</u> <u>➡ G III - 7, 8, 9</u></p> <p>★ 2回目 ・ Can you do it? I can do it. のやり取りを T1, T2 と児童で行う。</p>

	<p>Please copy me. ○○ 1,2 Ss: ○○ T1: Good. Next, … (8種類の動物で同じ流れ)</p> <p>T1: perfect!! Today's story was "From Head to Toe" T: Story time is finished.</p>	<p>・児童が見て真似できるように、T1,T2も絵本と同じ動きをする。</p> <p>→G I—1, 2, 3</p>
最後の挨拶♪ Goodbye song(1分)	<p>T1: Next, let's sing "Goodbye song". Are you ready? S: Yes! (CDありで歌う) T1: That's all for today. See you next time. Everyone, goodbye.</p>	<p>・CD ("Goodbye song") ・ラジカセ</p>

4. 考察

基本的に授業中のやり取りは英語で行われる。児童にとっては、これから学ぼうとする言語で授業が行われていることになる。このことは既に義務教育段階で英語を学び、高等教育でも英語を学習し終えている大人である教師でも不安になるのであるから、児童は一層の負担感を持つことは想像に難くない。しかし、日本語に頼る癖を学習開始当初から取り除くほうが、児童にとってはもちろん、指導者にとっても良いと考え、いくつかの工夫をして、児童が余計な負担感を感じずに学べるように授業設計をしてきた。以下、授業設計で気を付けていることを、順に述べたい。

4.1 授業の流れを固定し、黒板に掲示する

第一点目は、大まかに授業の流れを決め掲示することである。佐藤（2018）など、多数述べられているように、このことが、児童にも教員にも見通しを立てやすくし、児童の負担感を減らすこともできるし、また、教員自身も授業を進めやすくなり、安心感と自信をもたらすであろう。

4.2 視覚情報・音声情報・文字も視覚情報の一部として、バランスよく提示する

小学校外国語および外国語活動では、ピクチャーカードと呼ばれ絵や図柄とその名前を示したA4サイズの単語カードを使って、新出単語を導入する。これはまさに、「ガイドライン1：知覚するための多様なオプションを提供する（本稿記号G I—1）同じ情報を異なる形態（例えば視覚、聴覚、触覚など）で提供する」に相当し、児童の理解を助けると考えられる。

4.3 言語情報と非言語情報を、指導者も学習者も上手く使う

小学校外国語および外国語活動では、また、指示の際に身振り、手振り、顔や声の表情も使うのが通常である。一方、子供たちの方も、言葉のみならず、身振り手振りを交えてコミュニケーションをとっても良いのではなく、むしろとることが求められている。それぞれの子供が、自分が望む方法でコミュニケーションをとることができる。

5. まとめと今後の展望

本稿では、小学校外国語、外国語活動の問題の一つである教員不安、これを解決する手立ての一つとして導入している授業デザインを、全ての児童が学べる「学びのユニバーサルデザイン」の観点から説明した。今回は紙幅の関係で、児童の進歩を紹介していないが、機会を改めて報告したい。

謝辞

本稿に紹介した授業実習と、本稿における報告をお許しくくださった小学校関係者の皆さまには、心より感謝いたします。また、査読委員会の先生方には、大変示唆に富んだ、有益なご講評をいただきました。心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 株式会社イーオン（2021）「小学校の英語教育に関する教員意識調査 2021」
https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_210315.pdf
最終閲覧日 2023年1月1日
- 文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック：実習編」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_3.pdf 最終閲覧日 2023年1月1日
- 文部科学省「令和3年度公立小学校における英語教育実施調査」（調査基準日2021年12月1日）、
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00001.htm 最終閲覧日 2023年1月1日
- 沢谷佑輔「小学校外国語活動における教師の「学びのユニバーサルデザイン」に基づく実践—中学校・高等学校の英語教師との比較を通して—」『北海道文教大学論集』, 2020 55-63
- 田上美由紀・猪狩恵美子「日本におけるユニバーサルデザイン教育をめぐる研究動向—インクルーシブ教育の実現を目指した通常学級改革の視点から—」『福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学』第3号, 2017 19-26
- The Center for Applied Special Technology (CAST) 「学びのユニバーサルデザイン (UDL) ガイドライン Version 2.0」日本語版翻訳：金子晴恵, バーンズ亀山静子, 2011

A Study of English Education in Public Elementary Schools in Japan: Trial of Universal Design for Learning' in English Education for Elementary Students

Yumi MATSUMOTO

Abstract

English lessons for teaching practice to be certified as J-SHINE at Tamagawa University have been designed with various communicative strategies to make elementary students understand the contents provided. This research is aimed to re-organize such strategies as those for 'Universal Design for Learning' by CAST, which would propose some suitable method for English teaching style concerning diversity of learning.

Keywords: Foreign Language, Foreign Language Activities, diverse learning styles, Universal Design for Learning (UDL)